

空穂短歌の魅力

八回卒 橘 宏子

(一) 空穂短歌の評価

全二十九巻にもおよぶ『窪田空穂』（昭和43・3完結）の膨大で果てしない作品群の中には、読者の心の中にずしりとのしかかる内実のある歌が実に多いのである。

その中でも、次に掲げる歌は、作者の人生観に触れた歌であって、苦しい現実に対処して苦しさによって悟り、悩みの果てに到達した境地を歌った歌として深く心ひかれる歌である。

○よきところ一つある人は稀なるをさな求めそといはしきわが父
（大15年『鏡葉』）

○人の為には人は生れずその人をよしとあしきわが為にいふな
（大11年『鏡葉』）

○その物は然あるべくて然ぞある見るに憎くば見でありぬべし
（大11年『鏡葉』）

人生の紆余曲折の中で重ねる傷痕を、歌の間に間にただよわせながら、読者の胸の奥に深いひびきをのこす内実のある歌だと思ふ。

しかしこのような空穂の歌に対しての評価はどのようなに
なされてきたのであろうか。

たとえば、島木赤彦は、空穂の歌集『土を眺めて』（大7・12）を評して、

「よい歌は一首もない歌集だ」といっている。また他の歌人たちも、それぞれ、

「これは歌ではない。歌はこの先、即ち奥にあるべきもので、これは端書の連続にすぎない」

「これは余りにも日常生活の些末事ばかりを捉えている。

こうしたところに歌はない。」と述べているし、現代活躍中の歌人塚本邦男は（『解釈と鑑賞』昭和39・2）の中で、

「空穂は、思想にも、文学にも、ただの一度も致命的な錯誤は犯さなかった。その代わり、それによって真に自らの

芸術性を誇ることもなかった。……極言すれば、ここには個性も方法も存在しない。いわゆる個性も、いわゆる方法

も、空穂にとって無縁のものであった……。」と述べている。このようなことから、歌人窪田空穂に対しては次のよう

なことがあげられよう。

① 高く評価されている事柄

① (職業人としての優位性や名誉)

② 日本芸術院会員として。

③ 指導者としての円満さや卓抜さ。

④ 人間的な優位性。

⑤ 人格の高潔さや、円満さ。

② 高く評価されていない事柄

① 作品自体の文芸的価値。

② 歌人としての偉大さ。

このような評価のあることをみると、私は、空穂の短歌は正しく評価されてこなかったのではないかと思ひ、これらの評価は承服しかねるところがあるのである。

空穂の歌がこのような評価を受けるのは、ほとんどの評者が、この膨大な歌数をもつ歌人の歌の本質も、ほとんど解しようと思はず、しかもほとんど知らなかったのだと言へる。

そして評者たちは、明星における浪漫主義の抒情性とか、自然主義の影響というような時代の趨勢に眩惑された狭い短歌史的観点からのみ空穂の歌を評してきたのである。その結果、空穂の処女歌集『まひる野』にしても『みだれ髪』や『一握の砂』といった晶子や、啄木の歌集の間にも、過少評価されて光を浴びずに今日に到っているのがある。

以下の本稿は、個性も、方法も、思想とも無縁であったと評されている歌人空穂は、むしろ逆に確固たる歌論を持ち、独得な個性や思想に基づいた歌を多く世におくった歌人であったこと、空穂短歌は、その文芸性においてもっと高く評価されるべきであることについて論を展開してみたい。

(二) 空穂短歌の特質

空穂短歌を深く読み味わうとき、私たちは、空穂が、作歌姿勢において、或は歌そのものにおいても、次のような点で、個性や、方法、思想というものを明確にもちあわせていた歌人であったことを知らされる。

① 内実のある歌が多いこと(静的な世界・内なる世界を充実させて歌う姿勢)

② 自己に執する心

③ 空穂の弱者意識

④ 空穂の人生への価値標準

この四点の個性について考察をすすめてみたい。

① 内実の歌が多いこと(内なる世界の充実)

空穂自身、自分自身の歌集が、かつてどのような悪評をされてきたかについて知りすぎるほど知っていた。たとえそれは次のようなことからわかる。

『土を眺めて』(大7・12)という歌集を評した「よい歌は一首もない。」という島木赤彦の言葉や、「長歌は、その中の最も短小な一首がよいだけだ。」と評した梶山篤三郎の批評に対しても、空穂は、

「これらの批評を記憶しているが、うなずかうとは思わなかったことも記憶している。」（『わが文学体験』（昭和38）また歌集『濁れる川』に対する多くの評者たちの評価に對しては、（『濁れる川』に対する評者たちに答ふ）（国民文学大4・12）の中で

「私の自身の拙さを恥ぢた。それは、私は自身の弱さを知つてゐた。だがその弱さは求めるものを持つてゐる者の弱さで、そして求めるものの明瞭になつて来ないために一層弱くなった弱さであると自身では思つてゐた。言ひかへると、諦められない為の悲哀であると思つたからである。」と、委曲をつくしてそれらに反論している。

執念を心の奥底に秘めてありのままの存在として自己に執し、われという存在の意志を見定めていくこと。他や社会や権力におされて無批判に後退する弱さでなく、諦められないことによつて惹起する弱さが自分の弱さなのだ。空穂はいうのである。このときの弱者は、強靱な豊かな魂の強者となり、最大の強さを發揮する。このような基本的態度のもとに空穂は、とびこんで自滅せず、意氣熾んでなく、有名にならず、そして徹底的な持続性の中に自己の充実を緩慢にたゆまず進行させながら、内実のある歌をうみだしていったものであると思う。

それから七年後、空穂四十五才、大正十一年には、その隨筆『感日の感想』の中で、

「真象の、動的な擾乱したものより、仮象の静的な統一したものの方が、より多く生命を表象してゐるやうに感じら

れる。これは屢々持つ実感である。おそらく誰でもさうだらうと思う。ここに芸術の秘密がある。」ときっぱり言いきつてゐる。

「静的な、統一したもの」を「動的な、擾乱したもの」より優位に置いてはばからない自信、これこそ確固たる空穂文学論に即した方法や思想だと私はとらえる。このような静の世界、内なる世界を充実させようという信念、そこに本當の文学の場を据えてかかろうという方向性を樹立している空穂には、「空穂には個性も方法も無縁であつた。」などという狭い短歌史的観点にたつた評価は、あてはまらないのである。

このころの歌として歌集『鏡葉』（大11年）から抄出してみる。

○人の為には生まれずその人をよしとあしきとわが為にいふな

○憎みては懲りよ我のふるまへど人懲りずして我の荒みき

○生れかはり人を憎むも憎むべき人はつぎつぎあらはれぬ

べし
○その物は然あるべくて然ぞある見るに憎くば見でありぬ

べし
作者の人生觀に触れた歌である。人間が生きゆく中で苦しい現実に対処して、その苦しさによつて悟る心境を歌つてゐる。これは単なる諦念の弱さではなく、人間の現実相を強く把握しながら、みずからの力で獲得した人生觀を歌つた歌として心ひかれる。これは、まさに空穂の静的な内

なる世界を歌った歌なのである。静的な統一したものを、動的な擾乱したものより、優位に置いている空穂の文学論のおよんだものとして受けとりたい。このように空穂の歌には内なる世界を歌った歌の中に内実のあるものが多いように思う。

② 自己に執する心

次に空穂の特質としてあげられる重要なものとして、「自己に執する心」（自己に復る心）をもって歌を詠んだ歌人であったということである。空穂ほど「われに執した」歌人はいないといわれている。「われ」に執し、「われ」のおき場、「われ」の実体把握に執し続ける世界を見出そうとする強い気持を働かせながら、その一方で、「われ」即ち自己に因われることへの省察を加えてみたりする。「われ」に執しながらも、「われ」「我執」への観照性をも、あわせもつ心情、そこに私たち読者は、我と我が身を、我が心をうつつし見るように吸いこまれてゆくのである。抄出歌によってそれを裏付けてみたい。

○づけづけと罵りざまにいふことのいつか悲しき咬きに落つ

○逃げてゆくものを見つつも追ふとせぬ三十路のころ我と寂しむ

○人間のいとすなはなる願ひをば胸にさやかに持つ日となりぬ

○げにわれは我執の国の小さき王胸おびゆるに肩そびやかす

○いたみつつ生きは来ぬれどわが心いまだ我が世に懲りぬと言はなく

このように、あるときは自己を肯定しながら、あるときは「われ」を傷めつけるように、そして、ある時は、「われ」を焦燥感の中においたてるようにさまざま角度から、「我に執して」歌っている。

そして時には「われ」に執することに深い省察・内省を加える観照をただよわせる歌も詠んでいるのである。

○みづからに執せばあはれ世は小さし足高くあげ踏みて行かばや

○何をさは苦しみて我のありけるぞ立ちて歩めば事なきもの

この二首などそれに該当するものである。

また空穂は、大正十二年執筆の『歌の詠み難さ』という文の中で「自己確認」という点について次のように述べている。

「四十代にはいると、自己というものがわかりかかってきた。それまで環境を限りなく大きいと思ったのは誤りであったと思うようになった。……事実は自己に復ったということだ。……さて、歌としては、私は今、自己に復る心、それだけが歌だと思っています。自己に復った時だけ歌が詠めます。」と言い切っている。ここに私は空穂の個性をみるのである。

③ 空穂の弱者意識

空穂が、大正四年「濁れる川」の評者たちに答えている文、「私は自身の弱さを知っていた。だがその弱さは、求める物を持ってゐる者の弱さで、そして求める物の明瞭になりて来ない為に一層弱くなった弱さであると自身では思っていた。言ひかへると、諦められない為の悲哀であると思つてゐたからである。」

前述したようにこの弱者は、社会の権力とか理不尽な自分においかぶさってくる潜在的な圧力に対し、無批判に後退する弱さでなくて求めること、諦められないことによつて惹起する弱さなのである。退いて守る執念を内に秘めた弱さなのである。この空穂の基本的態度を、武川忠一氏は、（『短歌』38・7）で『弱者の執念』と呼んでゐる。

この『弱者の執念』は、空穂を自滅させず自己の内的世界を充実させることを持続的に間断なく行わせながら、内実のある歌を生ませていくのである。

求める物の明瞭になつてこない為の心の苦しさを、旋頭歌の中で

○沈黙の心の海にうかまんとして、

うかみあへずたゆたひてあり一つの言葉
とこのように歌っている。

また、この『弱者の執念』とかかわるものとして大麥興味をひき、そして、空穂の文学態度を鮮明に表現した長歌「友に寄す」は、注目に値するものである。この長歌は昭和十年の作である。

「文芸の名に隠れて、貴族趣味にあこがれる人よ。我は思

ふ。文芸とは貴族の心を持ちて、平民の道を行ふものなりと。正直に率直に、有りを有りとし、無きを無しとし、入用を拾ひ、不用を捨て、平易なる言葉もて語るべきなりと。此の心人に好まると厭はるるとは問ふ所にあらず。我はただかく信じ、かく行ひ、足らざるをこそ恥づれ、いまだ疑ふ事を知らず。」

○社会には公平あらずとかつ知れど憤ろしき胸衝きてくるこのように弱者を支えていたものは、耐えることによつて自己をたわめ、自己研磨をしながら内実のある歌を生ましめていく文学態度であつた。ここにおいて『弱者の意識』からくる弱さは、もはや強さに転化していったのである。

世の評者たちは、このような謙虚で、内面的なものもつ強さに対して、正しい評価をしていくべきであるし、もっと光をあてていくべきであると思ふのである。そして二十九巻にも及ぶ膨大な歌の海である『窪田空穂全集』に対しても、敬遠せず、もっと丁寧なとりくみをした上で、正しい評価をしてほしいし、もっと空穂の歌を本当に知ってほしいという気がしてならない。

④ 空穂の人生への価値標準

空穂が五十才の頃（昭和二年）に詠んだ長歌を味わつてみる時、空穂は、わが人生に対して「我と立てし価値標準」をもつて生きていたことがわかる。

この「我と立てし価値標準」というものに対して、武川忠一氏は、（『わが愛する歌人』△有斐閣新書▽）の中で、「自己定位」という表現でよんでいるのも興味深い。

その空穂の長歌は次のようなものである。

心に迷ひ持てる頃に

「我と立てし価値標準に、殉じける人を尊み、我もまた然せむものと、ひたすらに思ひ続けぬ。生きの世のさみしきからに、我が心たゆたはしむな。我は我が価値標準に、いさぎよく殉じ去るべし。よくも悪しくも。」

「我と立てし価値標準」を中心にしながら、内実のある人生を展開させていく骨太い意志の世界をうかがわせる。

それでは、空穂の人生への価値標準・自己定位（武川忠一氏の表現をかりるが）とはどんなものなのであろうか。

○雪つえばみ低くも歌ふ鳥とこそ雪深き野に生まれぬる身の（第一歌集『まひる野』〈明治38年作〉）

敵しい自然の中の清冷な野の雪をついばむ小鳥は、低い声で歌うというのである。寒冷地の雪深き野は、その敵しさゆえに小鳥に高い声では歌わせない。しかし低く歌いながらも夢をもっていないのではない。夢を追い求めているのである。

空穂は、この低い声で歌う小鳥に、低い姿勢で、低い声で歌いつつ夢を追い求め、歌めるものを手ばなさない自分自身の若き日の姿を重ねあわせている歌であると思われる。

清麗な自然・寒冷地の敵しい風土の中に、低い姿勢で生きる人々の中で、生を享けた空穂は、次のように述べている。

「資質乏しく生れた身であるが、向上したいという念だけは保ち続けて、それを生きがいとしてきた。向上は動揺を

をとおしてのみ遂げられてゆく。動揺は向上の道程である。」

これは、空穂八十才『丘陵地』（歌集）の後記の言葉である。求めても求められないことを知りながら、なお夢を追いつながら求め続けてゆく粘り強い文学的姿勢や人生を生きる姿に驚かされるのである。低い姿勢にいて、高い心の世界を求め続ける空穂の姿には、高村光太郎の次の二つの詩を貫く思想に共通しているところがあり、興味深く感じられる。

最低にして最高の道

高村 光太郎

もう止そう。

ちいさい利欲とちいさい不平と、

ちいさなぐちとちいさな怒りと

そういううるさいけちなものは

ああ、きれいにもう止そう。

わたくしごとのいざござに

みにくいしわを縦によせて

この世を地獄に住むのを止そう

こそこそと裏から裏へ

うす汚い企みをやるのは止そう

この世の抜駆けはもう止そう

そういうことはともかく忘れて

みんなと一緒に大きく生きよう

見えもかけ値もない裸のところで

らくらくと、のびのびと

あの空を仰いでわれらは生きよう。

泣くも笑ふもみんなと一緒
最低にして最高の道をゆこう

冬

高村 光太郎

新年が冬来るのはいい。

時間の切りかへは縦に空間を裂き

切面は硬金属のようにぴかぴか冷い

精神にたまる檻縷をもう一度かき集め

一切をアルカリ性の昨日に投げこむ

わたしはまた無一物の目あたらしさと

すべての初一步の放つ芳ばしさに囲まれ

雪と曇と水と霜と

かかる極寒の一族に滅菌され

ねがはくは新しい世代といふに値する

清潔な風を天から吸おう

最も低きにいて高きを見よう

最も貧しきにいて足らざるなきを得よう

ああ、しんしんと寒い空に新年は来るといふ

光太郎のこの二つの詩にみられる

○「最低にして最高の道をゆこう。」

○「最も低きに居て高きを見よう。」

○「最も貧しきに居て足らざるなきを得よう。」

これらの三句には、光太郎の生き方の態度をはっきりと示すものが見られる。自分の正しい意志によって、高きも

のに立ちむかい追い求めていこうとする光太郎の人間の決意は低い姿勢で生きながら、たえず向上していこうという念を保ち続け、深く高い心の世界を追求してやまない空穂の世界をよく言いあてていってなにか厳肅な気持にさせられる。

自分自身の歌の構築のために自分独特の生き方や考え方を大切にして生きた空穂は、弱者に執しながら自己の充実を持続的にはかって生きていったものとみえる。

(三) まとめとして

窪田空穂の作品自体については、個性も、思想も、そして方法も存在しないと評価され作品自体の文芸的価値が高く認められていない傾向にあるが、むしろ空穂短歌ほど、前述したような個性・思想・方法など

① 内実のある歌の多さ

② 自己に執する心のあらわれ

③ 弱者意識のたゞよう歌

④ 人生への価値標準を有した歌

を有していて確固たる方向性を示している歌は他にはないということがたしかめられた。

空穂の歌人としての一生を、そして作品を、時代の趨勢に眩惑されたような狭い短歌史的観点で評価するのではなく、もっとこの膨大な空穂の作品に身を入れてとり組む姿勢の中から、空穂の作品を正しく評価する評価のあり方が生まれてもよいはずである。

— おわり —